



[家形A] 82×55×30cm、[家形B] 79×39×22.5cm

資料紹介 家形埴輪 推定 水木古墳群5号墳出土

埴輪とは、3世紀後半から6世紀にかけて作られた素焼きの土製品のことです。死者を葬った場所を他と区別し、神聖な場所として示すために古墳の墳頂やその周辺に並べ立てられた埴輪には、円筒埴輪と、人物や動物、家器財をかたどった形象埴輪の2つに大別できます。円筒埴輪よりも遅れて作られるようになった形象埴輪は、その種類や並べ方などによって当時の人々の生活の一端を知ることができる貴重な資料です。

紹介する資料は、日立市水木町の水木古墳群5号墳周辺で出土した家形埴輪です（以下、写真右を「家形A」、写真左を「家形B」）。家形Aは屋根の上に3本の鰹木が載った寄棟造で、屋根は各面の境が不明瞭で全体的に丸みを帯びており、軒先は短く反り返っています。屋根には斜格子文様や三角文様が、母屋の部分には一部に三角文様が描かれており、青灰色（青色が退色したものか）と赤色で彩色されています。母屋の正面には長方形の孔、両側面には丸孔が開いています。また、母屋の表面には縦方向と横方向に突帯があり、縦方向は柱、横方向は横木と推

定されます。

家形BはAよりやや小さいですが双子のように似たつくりをしています。異なっているのは屋根の棟部分に三角文がある点と、鰹木が4本載っていること、表だけでなく裏にも長方形の孔がある点です。

家形埴輪には、建築の形式から平屋式と高床式が見られ、また屋根の形式の違いから入母屋造、切妻造、寄棟造に分類されます。茨城県内では入母屋造と寄棟造の家形埴輪が多くみられます。この家形Aと家形Bは寄棟造の全体が縦に長くなっていますが、これは建物の高さを強調した表現だと思われます。近隣の高萩市向畑古墳と東海村戸ノ内古墳からも、同じ形式の家形埴輪が出土しています。

（滑川有花子）

◆これらの資料は、開館50周年記念収蔵資料展「市宝展 DX PART1」（～5月11日）で展示しています。また終了後は1階常設展示室で展示します。